謹賀新年 2011

伊佐市長

隈元　新

一陽来復

あけましておめでとうございます。平成23年の初春を心よりお祝い申し上げます。初日の出や三社参りはいかがでしたでしょうか。郡山八幡神社や忠元神社、箱崎神社や湯之尾神社などを始めとして、それぞれの集落に近いところに神社があるのが、伊佐のすばらしい風土です。神々に守られた郷です。

昨年は口蹄疫の影響で畜産関係のみならず、地域活動や経済活動に大きな影響がでました。合併して今年は3年目に入りますが、災害や予期せぬ不慮の事態が起きないことを願います。市政運営に携わる中で、地域の神社・仏閣や歴史、大地・宇宙に特別な思いを抱くようになりました。その一つに関白陣もあります。

昨年11月、新納忠元公400年祭を執り行う中でその思いをいっそう強くしました。関白陣は伊佐平野を一望できるまことに眺めのいい小高い丘です。忠元公が剃髪して入道名を「拙斉」と号して、424年前、曽木大堂ヶ尾において天下人秀吉と会見したので、関白陣と呼ばれるようになりました。

その場において、秀吉の側近の細川幽斉が詠んだ、「口のあたりに松虫ぞ鳴く」の下の句に対して、忠元公は即座に、「上鬚をちんちろりんとひねり上げ」と詠い返したのは有名な話です。権力者に対する心に秘めた強い反骨精神の現われとも思えます。

忠元公がその時数え年62歳でした。私も今年は同じ歳になり、行政に関わる立場から、忠元公のお気持ちはいかばかりだったかを知りたいものです。関白陣から一望する郷は穏やかな初春です。伊佐市は今年から、広島市に事務局がある「平和市長会議」に加盟しました。このような平和が限りなく続くことを心から願っております。

関白陣　一陽来復　郷は春

―新―

新年のあいさつ

伊佐市議会議長
山下　親志

飛躍の年に

　新年おめでとうございます。ご家族で穏やかな新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

　伊佐市となって３回目の新年を迎えます。私ども議会も旧市町のそれぞれの特性を認識し、課題を共通のものと捉え、皆様方の生活向上の一助となるよう努力いたしております。

　昨年は、伊佐市出身の俳優「榎木孝明」さん企画・主演による映画「半次郎」の公開や「35年ぶりの花園出場」という快挙は逃したものの大口高校ラグビー部の健闘など明るい話題の一方で、４月に発生した口蹄疫が、その後えびの市で感染例が確認されたことで、伊佐市の一部も搬出制限区域内に入り、夏祭りをはじめ、いろいろなイベントが中止や延期を余儀なくされる事態となりました。幸いにも、昼夜を問わぬ消毒作業に対する市民の皆さまのご協力により、鹿児島県内への侵入を防いだものの、地域経済に与えた影響は、長引く景気低迷に追い討ちをかけるものとなりました。

　この間、議会といたしまして口蹄疫の感染拡大防止策の徹底と支援対策を求めて、国や県へ意見書や要望書をあげるとともに、臨時会においては地域経済浮揚対策のプレミアム商品券の発行に要する補正を早急に可決するなど、行政と一体となった取り組みを進めてまいりました。一刻も早い畜産業の復興と地域経済の回復を願うものであります。

　年の初めに当たり、何事にも油断せずに全力を尽くして努力すべき事のたとえとして、今年の干支「兎」を用いた「獅子搏兎」（ししはくと）の格言どおり、伊佐市が将来に向かって大きく飛躍しますよう、全力を尽くすことをお誓いするとともに、この一年が市民の皆さまにとって幸多き年となりますようご祈念し、年頭のごあいさつといたします。

2
0
1
1

『日々勉強』

明けましておめでとうございます。人生早いもので５回目の年女、世間では定年と言われる年になりました。これまでの日々を振り返ると、周りの方々に助けられ、教えられてきた人生だったと思います。仕事での出会いや民生員としての活動を通して、いろいろな人の生き方や家族の在り方など、学費も払わずに貴重な人生勉強をさせていただいたと思います。これからはその経験を自分の財産として、人とのつき合いを大切にし、趣味を楽しみながら、家族と共に充実した毎日を送れたらと願っています。

60

戸田貞江さん　（主婦）

『兎走烏飛』

2011 年ついに３回目の年男を迎えました。早いもので 36 歳、職場でも 19 年目を迎え若手から中堅というポジションになり、これからは、後輩に伝え教育していきたいと思います。また私生活では、結婚し２人の可愛い子ども達に恵まれ楽しい日々を送っています。子ども達のキラキラ輝く希望にあふれる目を見ているとますます頑張らねばと思う日々です。今年は、干支の兎のごとくホップ・ステップ・ジャンプと飛び跳ねながら駆け抜けていきたいと思います。

36

沖田義博さん　（会社員）

『夢』

小さい頃から「将来の夢」を聞かれると「保育士」と答えていました。恩師の影響もあり夢は成長するにつれ揺らぐことのない道となり、曲がったり登ったりしながら進んできました。働きはじめて３年、少しづつ変化していく環境の中で多くの事を学び、中には子ども達から学ぶ事も。日々驚きと喜びの連続です。子ども達にとって一番大切だと思う時期に関わり、その成長を間近で見ることのできるこの仕事を誇りに思います。今は恩師の背中を追い越していく事を目標に頑張っていきたいと思います。

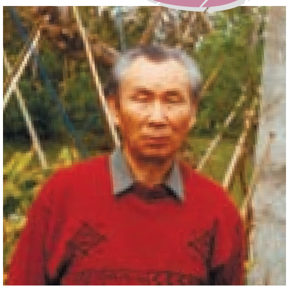
24

竹牟禮泉さん　（保育士）

84

『老いを生きる』

“人生は長き道距を歩いて旅する如し”と云うが、私は 84 歳兎年の年男。忍び寄る老化は止められない。80 歳で 50 年続けた菊作りをやめた。趣味の無い生活は淋しいと痛感、老いは生物が必ず通る道故生きていることに感謝し、日々を大切に生きるしかないと到達。晴れた日は野菜作り、雨の日は歴史物語が中心の読書。現在、“坂本龍馬”と韓国ドラマ“イ・サン”に夢中。午前中は新聞を広げ世の動きに目を止めるが、今の出来事、私には納得のできないことばかり。それでも私は、小さい命の火をともしながら生きようと思う。



大浦厚夫さん
（元教諭）

年男年女 卯

明けまして
おめでとうございます。
伊佐市在住の年男さん年女さん7人に今年の抱負など聞いてみました。皆さんはどうでしょうか？
今年も皆さんにとって良き一年でありますように。

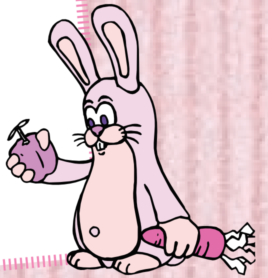
『わたしの新年の目標』

わたしには新年の目標が３つあります。１つは、空手で黒帯をとることです。今はまだ紫帯なので６年生の最後には、立派な黒帯をとりたいです。２つ目は小さい子にやさしくすることです。最上級生として下級生にたよられるような６年生になりたいです。３つ目は勉強です。６年生になったら歴史の勉強が始まります。西郷隆盛など、郷土の偉人についてくわしくなりたいです。

この３つの新年の目標を達成できるようにがんばります。

12

石原香鈴さん
（菱刈小学校）



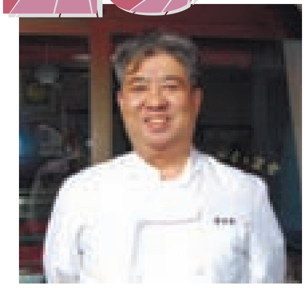
『口蹄疫でもらったやる気』

脇迫正義さん
（畜産農家）

72

今年の干支はうさぎ。うさぎのような元気な新年を迎えられた事と思います。昨年は宮崎県で発生しました口蹄疫が隣のえびの市まで広がり、水際で食い止めようとたくさんの方々が一体となり24時間体制で消毒に精を出していただきました。特に畜産農家を激励に多くの方々から救援金などをいただき感謝の気持ちでいっぱいです。心配された風評被害もなく、セリ市も再開され、皆さま方から「やる気」と「夢」、「力」をいただきほんとうに有難うございました。今年はＴＰＰなどの問題が出ていますが皆さま方の知恵で良い年で有りますよう願っています。

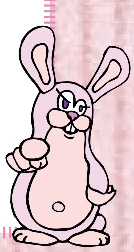
48



周防原利幸さん
（自営業）

『干支に習って』

今年の話題のひとつに九州新幹線全線開業がありますが、これが伊佐市の経済に及ぼす影響は今のところマイナス面が大きいと考えられています。ただこの現実に対して愚痴ばかりをこぼしてもだめだと思います。今年の干支は卯、ウサギは危険を察知すると耳をピンと立てて周りの状況を観察して行動します。私も持てるアンテナをいっぱいに広げ、次なる行動をよく考え行動したいと思います。決して大きいことはできませんが、これからの伊佐市を考える人たちの一助になれる事を心がけたいと思います。



銀杏文芸賞　最優秀作品紹介

エッセイ部門

幼い漁師

霧島市　児玉　久

宮崎の北の方に平岩という小さな町があります。この辺りは山が海のほうにせり出していて、その地形は海に小さな島をいくつも作り出しています。私はその小さな漁港の長男として生まれました。漁港といっても私の小さい頃は、自然の入り江が船溜りのようになっているだけでした。祖父や父はそこで小さい船にのって漁師をしていたのです。主な獲物は、伊勢海老です。小さい島々が作り出す瀬が伊勢海老たちの格好の住処になっていたのです。

父が若くして他界し、隠居をしていた祖父がまた船にのる事になりました。すでに母も他界しており、私達兄弟は祖父母の元で育てられたのです。近くに伯父がいて年老いた祖父を助けるために一緒に船に乗り始めました。私が十歳の時の事です。その頃から私も船に乗るようになりました。

伊勢海老漁は夜に網を仕掛けて翌朝に取り込みます。夕方、伯父が会社から帰るのを待って船を出します。船外機の操作は伯父の役目です。漁場までは船外機で白波を上げながら行くのです。私はその船の上で受ける風が、とても好きでした。漁場につくとエンジンをとめて艪を出します。艪は祖父の役目です。祖父が艪で岩場にそってゆっくりと船を進めるのに合わせて、伯父が網を入れていきます。私の役目はその網をいれる手伝いです。時々、重しのための石をいれたりするのでした。

朝はまだ暗いうちから港にいきます。仕掛ける時と同じように岩場にいってから、艪をつかってゆっくりと網を上げていきます。次々と網に絡まった魚や海老が上がってきます。殆どはまだ生きていました。伊勢海老はギィギィと鳴きながら上がってきます。長い角を折らないように気をつけながら海老を網から外すのです。この伊勢海老は一晩中、網にからまったまま海の中で過したのでしょうか、少し悲しげな鳴き声でした。

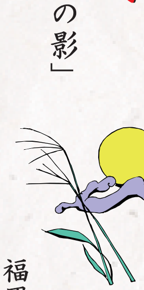
そんな海も、意外な表情を見せる事があります。高校生の頃の事です。急に部屋の明かりがつけられて、見上げると祖父が立っていました。夜の間に天候が急変したのです「風が出てきた。利也を起こして来い」私は急いで着替えて前の家に走りました「伯父さん」声をかけると、伯父も既に起きているようで「おぅ」と返事をしながら出てきました。伯父と港にいくと祖父がもう船のロープを解こうとしています。急いで乗り込み網を仕掛けた岩場に向かいました。まだ日の出までは時間が有りそうです。薄闇の中、船を走らせます。荒波の中で小船を走らせるとパタンパタンと波が船底を打ち、その度にお尻が浮き上がります。仕掛けた岩場に着くと、祖父が左手で艪を漕ぎながら右手で竹竿を構えます。岩場に乗り上げそうになったとき竿で突くためです。いつもは大切にされる伊勢海老たちも、その時ばかりは構っていられませんでした。早く網を回収しないと網が丸まって使えなくなってしまうからです。

そのようにして幾つかの猟場を済ませ残り少なくなったときでした。突然、大きな波が来て、祖父が竿を突く間もなく船が岩場に乗り上げてしまったのです。次の瞬間、伯父は船を飛び降りて、船を押し始めました。祖父も竿で突いています。また波が来て船が少しずれました。伯父はこの時とばかりに船を押します。大きい声があがります船が漸く岩場から離れました。伯父を残して。祖父は一度船を岩場から離しゆっくりと岩場に寄せていきました。伯父は船に飛び乗り、揺れる船の上を走り、艫に向かい、エンジンをかけました。一回、二回と始動ロープを引きますが、なかなかエンジンがかかりません。漸くエンジンの音が聞こえ始めると、伯父は直ぐに船先を港に向けました。まだ取り込んでいない網もありますが、もう諦めたようでした。港に戻ってみると伯父の左脇腹に血が滲んでいました。

そんな祖父も私が就職するのを待つように他界しました。伯父は会社を定年退職し漁業に専念していましたが、数年前に他界しました。私は海とは縁のない仕事を選び、実家は弟が継ぎました。伯父の家も代替わりして、従兄弟がきりもりしています。弟も従兄弟も会社勤めだったので、伯父が他界したときに漁業権を返上しました。今、船は港の奥深く上げられたままになっています。乗り手の居なくなったプラスチック船は、朽ちることもなく雨水をためています。自然の入り江だった港は、立派な防波堤が出来、テトラポットに囲まれ、大きな船が並んでいます。その外側には以前と同じように小島が白い波飛沫をあげています。ただ、そこには祖父も伯父も、そして幼い漁師だった私も、もう居ません。

短歌部門

「烏兎の影」



福岡県宗像市　巻　桔梗

引き潮のわが体力や寄する波濡らしし砂の半ばにて退く

階段でみちをゆづれば乙女子は女王のやうに降りてゆきたり

昨夜(きぞ)は酢の効用聞きし、この夕餉胡麻はいかにと訊ねむ妻に

教へ子の身にもひとしく烏兎の影落ちてかたみに酒量気づかふ

目覚むれば昧昧の窓海底(うなぞこ)に命の灰はけふも積むらむ